

研究レポートその1

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所 所長

池永寛明



都市・地域の ルネッセ(再起動)に 向けて

日本社会の流動化が進み、確たる未来予想図が描けないまま、どのような価値を創造し受け継いでいけばよいのだろうか。生活文化の基盤である「都市」「地域社会」の価値を再起動し、過去から現代、未来へつなぐ「ルネッセ」の提言を行う。

内と外と 過去と未来とを つなぐというつづき

適合不全の時代

これからの社会はどうなるのだろうか？ 大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所で、「2030年における社会の風景」を考えたが、解像度の高い「未来予想図」が描けなかった。これまでの延長線上では未来を読み解けないのである。「社会構造が逆転し、諸相に適合不全が現れはじめている」と感じざるを得なかった。

未婚の人が多い——結婚したいのに結婚できないのか、結婚できないのか？ 就職しない人が多い——大学を卒業しても就職しないのか、就職できないのか？ 結婚しない人、就職しない人の問題と捉えられがちだが、そもそも夫婦、進学、就職という形態が現代社会と「適合不全」となっているのではないだろうか？

単身老人が増えている。かつての「高齢者が家のなかにいる」という家族スタイルが適わなくなっている。「不適

合」とは心ならずも適わないことだが、適う適わないという次元を超え、「土俵」にすらのらなくなっている人がいる。さらに適う適わないという世界にそもそも関心すらなくなっている人もあらわれている(Chart 1)。

現代社会がこれまでの「価値観、規範・制度」と適わなくなったため、さまざまな社会問題をひきおこしている。過去と現代とが切れて繋がっていないことに着目することが現代社会を読み解く鍵ではないだろうか。

「まちづくり」の 現場で 感じていること

「まちづくり」という言葉がよくわからない。建物・公園・川・道路などの都市インフラのことをいったり、地域開発や地域社会の活性化、空き家のリノベーションのことをいったりと、「まちづくりのかたち」は多岐にわたる。

地方創生を目指す地域・自治体に対して、高齢少子化、観光、景観、食、医療、スポーツなどを論点に、各企業が部分的にアプローチしている。

大阪ガスもエネルギー会社の立場で、地域社会にかかわっている。東日本大震災に伴うエネルギー問題を受け、安全・レジリエントなまちを論点としたエネルギーソリューションを実践している。さらに都市計画、都市整備、防

災・減災、地域振興に向け、エネルギー、環境、火育、食育、スポーツ、ソーシャル・デザインにかかわっている。

私もこのような「まちづくり」の現場にかかわっているが、それぞれが部分最適に終始し、都市そのものが見えてこない。都市のコンテンツの一部にふれるが、都市のコンテクストが読み解けない。まちづくりにおいても「適合不全」がおこっているのではないだろうか。

都市とはだれのものか？ 当然ながら、そこに住む人、働いている人、勉強する人、訪れる人のものである。しかし都市という全体像が共有されず、都市にかかわる人それぞれが考える都市像で動いている。まちづくりは「虫の目」「魚の目」で捉えられるが、「鳥の目」で全体像が捉えられていない。さらにまちづくりの現場で議論されていることが、その都市でなくても、どの都市にでも通用することばかりで、

その都市ならではの「必然性」がないということ、短期的視点で対症療法的となりがちであるということ、まちづくりにかわる人がそのまちに住み、働き、終の棲家^{とすまか}としようとしていないことが気になる。

再生(アップデート) されるまち ——メルボルンとドイツの 都市戦略

印象的な言葉がある。「メルボルンにはオペラハウスや大阪城のような『アイコン』がない。しかしメルボルンには『本質』がある。まち全体でメルボルンを感じてもらうため品質をアップデートしつづけている」——「世界でいちばん住みやすいまち」といわれるオーストラリアのメルボルン市を2015年に訪ねたときに市の幹部から聞いた。

住まいが郊外に移り、週末はゴース

トタウンとなった都心部。25年前に都市デザイン家のヤン・ゲール氏に市場調査を依頼して、ビジネスだけのまちから、人間中心の多様性のあるまちづくりへの転換に着手し、メルボルンの中心部に人々を戻す活動を始めた。

メルボルン市のどの部局も「私たちのメルボルン市」という都市像を明確に共有していた。「メルボルンに、どのようにしたら海外の企業に来ていただけるかを考えた。海外駐在員とその家族が5年間メルボルンに住んでもらうために、どのような暮らしができたからメルボルンに住みたくなるかを考えた。海外の駐在員がこのメルボルンスタイルを過ごすために、どのような学校、病院、商業施設、スポーツ・文化施設が必要かを考え、まち全体でメルボルンを感じてもらえるよう都市を変革させていった」。生活者の視点から、

住まいと都市、企業のあり姿をデザインし、魅力的なメルボルンへと、長い

旅路を歩きながらゆつくりと変えていった(Chart 2)。

「ドイツでは、『都市』のイメージが明確だ。400年前の建物に、新たな機能をインストールする『都市の再生(アップデート)』がおこなわれている」と語るのは、ドイツのエアランゲン市在住のジャーナリスト高松平蔵氏。高松氏と日本とドイツのまちづくりの比較を議論して見えたことは、ドイツでは「都市」のイメージが共有されていること、都市を「場」と捉え、「場」の質と都市のなかの「経済性」をいかに高めていくかが都市経営の論点であった。

ドイツでは、自分たちのまちはかつてどうだったのかということ、「アーカイブ」として残し、市民のだれもがアクセスできるような仕組みができあがっている。

さらに日本ではとすれば技術論に終始されるが、ドイツでは「どうつく

Chart 1

適合不全

不適合 (ミス・マッチ)	適う適わないという選択で「適わなく」なった
非適合 (アン・マッチ)	適う適わないという世界を超え「土俵」にのらなくなった
無適合 (アウト・オブ・マッチ)	適う適わないという世界にそもそも関心がない

Chart 2

メルボルンの戦略

世界企業のアジア・オセアニア支社・工場を誘致するため、メルボルンと競合する国内外の都市をベンチマークし、海外の駐在員が5年間メルボルンに住んでもらうために、どのようなまちならば選択してもらえるのかを考え抜き、「住まい」「学校」「医療」「スポーツ」「文化・芸術」「食」「アミューズメント」を再構築した。



メルボルンが生み出した強み

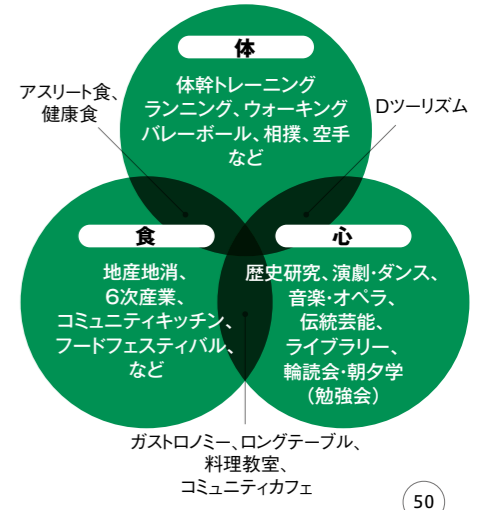
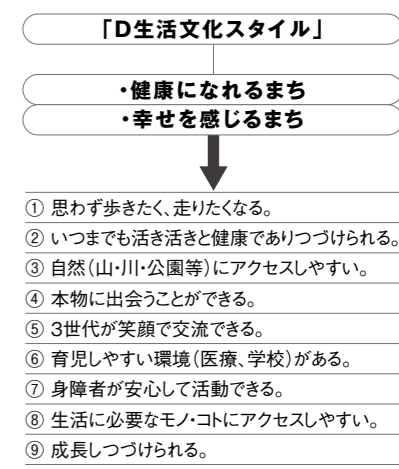
- ①レーンウェイ(路地)
- ②芸術文化
- ③食・ガストロノミー
- ④ショッピング
- ⑤古い建物・古い街並み、伝統文化

Chart 3 文化—— 耕し栽培する culture

Step 1	「作物」を選ぶ
Step 2	「耕地・土壌」を決める
Step 3	「種」を用意する
Step 4	「種」を蒔く
Step 5	「水」を与える
Step 6	「肥料・養分」を与える
Step 7	「除草・害虫駆除」する
Step 8	「収穫」する



Chart 4 ある自治体の地域戦略



「のか」という技術論と、それを「どう使うべきか」という議論がかわせて行われている。さらに地域経済が厚いため「職住近接」が実現され、議員、学者、企業人、市民、行政など幅広い層がまちづくりの議論に参画し、自分が住み働くまちのアップデートが行われている。

文化というものはなにか

気になることがある。まちづくりというと、日本ではグルメイベントやバルやマラソンが流行している。地域活性化を議論するとき、住民の関心を惹きつけようと「打ちあげ花火」的イベントのアイデアが浮上しがちである。しかしこの地域にも適用するもので、その地域ならではの「必然性」がなく、瞬間風速は出るがすぐ吹きやみ、「継続性」がない。地域を持続的に活性化、

発展させていくためには、そのまちに住む人が増え、その地域における商業、産業が動き出し、地域経済がまわるようにしなければならぬ。そのためには以下のように文化 (culture) を考える必要がある。

芸術、芸能、文学などのことを文化だと考える人が多いが、文化とは、地域・社会・都市固有の行動様式であり生活様式の総体を指す。文化の語源はラテン語の「栽培・耕作」で、Chart 3のとおり、

Step 1「作物」を選ぶ、Step 2「耕地・土壌」を決める、Step 3「種」を用意する、Step 4「種」を蒔く、Step 5「水」を与える、Step 6「肥料・養分」を与える、Step 7「除草・害虫駆除」する、Step 8「収穫」する

という手順で、「時系列の関係性」×「各要件内の最適化」によって作物は文化が生み出される。よって衣食住、芸術、生活、都市文化なども、本来地

域的概念で総括・複合化され地域文化として生まれる。しかしこの「時系列の要件構成」と「要件内容」に違いがない場合、地域文化に差異が生じなくなる。日本のまちがどこも同じに見えるのはそのためである。

このように文化は地域を栽培・耕作するもの、地域を構成する生活と経済を動かすものである。その関連性・連携性の本質を求め、その摂理に沿った再生産をおこし、再起動させていくことが、地域文化、俯瞰したまちの「栽培」となる。そして文化は栽培・耕作のごとく、引き継ぎ育て、再び次に引き継がれていかねばならない。

地域文化を核とした都市の取り組みに關与したことがある。

「私は自分が住んでいる都市の名前を言うのを躊躇することがある」とある女性が話した。彼女の住む大阪市近郊にあるD市は、人口減少、企業減少で税収減がとまらない。その自治体から

さらに日本はアップデートにとどまらず、内の軸と外の軸、過去の軸と未来の軸という4つの軸に、「守」「破」「離」というステップを経て、螺旋階段状に生成・発展させていき、新たな価値を生み出しつづけてきた。

「守」にて昔あった佳きもの、美しきもの、本質を発掘し、「型」をつくる。掘りおこされた「型」は過去の軸にアーカイブ化され、積層させていく。つづいて「破」において、未来の軸からの新しい情報と外からの異なる情報とを、「守」にてつくられた「型」とを組み合わせてアップデートしていく。そして「離」では、「破」で更新され

相談をうけた私たちはその市内の人と市外の人とでまちを何度も歩き、まちの強みと弱みを掘りおこした。地域に伝わる昔の話や地元のままさまざまな人の声を集め、読み解き、その地域に住んでいる人のために何をしたらいいのか、どのような人に住みたいと思っていたのか、そのために何ができるのかを考えた。

その都市に住むことで実現できる「生活スタイル」をつくり、10年間のロードマップを考えた。第1段階として小学校跡地に「スポーツ」「食」「文化」を融合した地域コミュニティ倶楽部を設立した。その倶楽部のキックオフに、かつてその地域の山に城をつくり畿内を制覇した戦国武将を主人公とした朗読劇「かつてこの地は日本の首都だった」を上演した。何もないと思っていた灰色だった自分のまちが色鮮やかなまちに変わり、その地域のさまざまなフィールドで新たな取り組みが

都市・地域の再起動のためにルネッセ

これから地域社会はどうなるのか？ 現代とこれまでの価値観とが「適合不全」をおこしはじめている。「適合不全」をおこしている真の課題がつかぬ、対症療法的な対策を逐次投入しつづけてきた。「適合不全」の要因で

ある過去と現代との断絶を繋ぎなおすことで、新たな価値が創造できるのではないだろうか。

日本はこの数十年、古いものを新たなものに作り変える「開発型」の都市づくりを行い、都市と地域の風景を一変させてきた。メルボルンやドイツのような、過去と現在を融合し「再生(アップデート)」させていく都市づくりとなっていない。

しかしながら日本はかつて古代・飛鳥から江戸・明治・大正と、海外を含めた新たな情報・技術を積極的に受け入れ、過去と融合し、価値のアップデートをつづけてきた。

さらに日本はアップデートにとどまらず、内の軸と外の軸、過去の軸と未来の軸という4つの軸に、「守」「破」「離」というステップを経て、螺旋階段状に生成・発展させていき、新たな価値を生み出しつづけてきた。

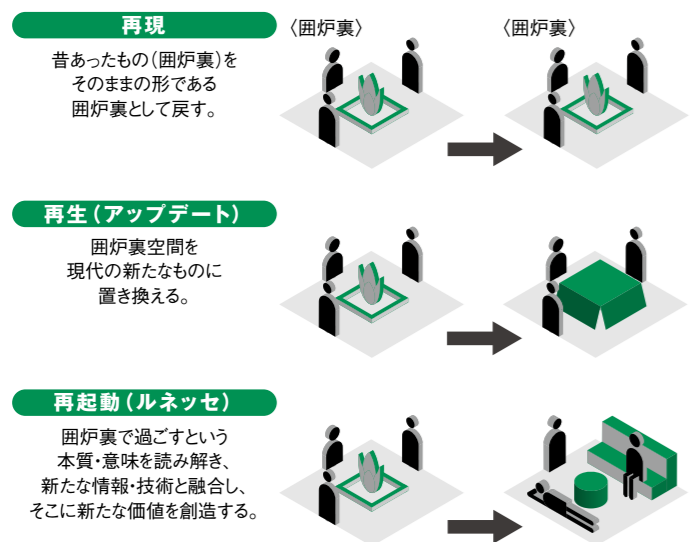
「守」にて昔あった佳きもの、美しきもの、本質を発掘し、「型」をつくる。掘りおこされた「型」は過去の軸にアーカイブ化され、積層させていく。つづいて「破」において、未来の軸からの新しい情報と外からの異なる情報とを、「守」にてつくられた「型」とを組み合わせてアップデートしていく。そして「離」では、「破」で更新され

た「型」をいったん解放して自在の姿とし、4つの軸とを融合させ、新たな価値を創造し、都市・地域がもともと持っていた「本質」を「ルネッセ(再起動)」させ、未来へと繋いでいかねばならない (Chart 5, 6)。

次号の情報誌CEL 116号より3号連続で、CEL 30周年企画として新たな価値の創造を目指し、「ルネッセ(再起動)」について特集し、具体的に読み解いていきたい。

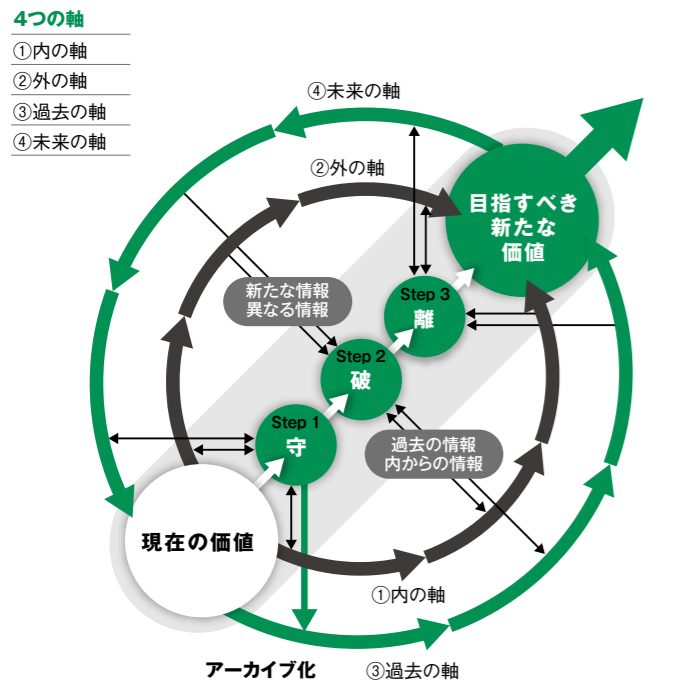
〔参考文献〕
「ドイツの地方都市はなぜクリエイティブなのか」高松平蔵著、2016年、学芸出版社
「マーケティング戦略は、なぜ実行でつまずくの」鈴木隆著、2016年、碩学舎

Chart 5 新たな価値の創造



*ルネッセ (Renesse) = ren(再び) + esse(実在する)の筆者の造語

Chart 6 「新たな価値」の創造に向けたステップ



Step 1	「守」	昔あった佳きもの、美しきもの、本質を発掘し、「型」をつくり、アーカイブ化する。
Step 2	「破」	新たなもの、外からの異なるものと過去より引き継がれる本質「型」とを組み合わせてアップデートして、新たな「型」をつくる。
Step 3	「離」	アップデートされた新たな価値に、4つの軸を融合することで、新たな価値を創造。